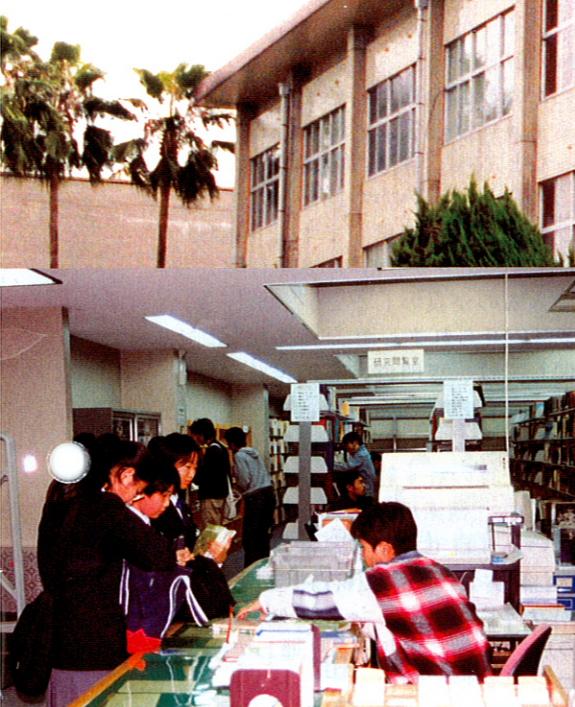
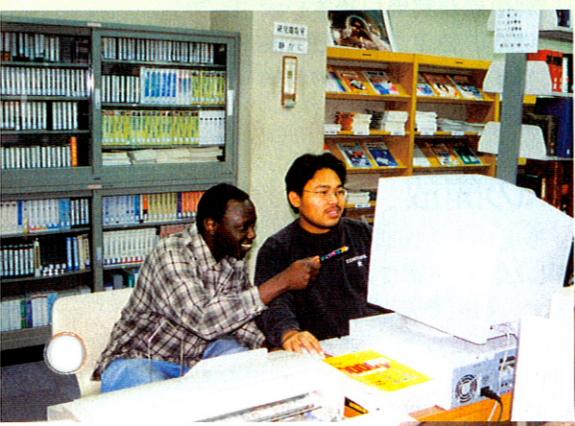


ARI AKE KOSEN

図書館報

Vol. 4
1998. Dec.



読書感想文コンクール	4~10				
入賞者	4	入賞作品紹介	5~10	審査を終えて	10
図書俱楽部から					11
ブックハンティングの紹介					11
平成10年度第1回ブックハンティング図書一覧					11
図書館統計					12~13
館長挨拶、全国図書館大会に参加して					14
INFORMATION、スタッフ紹介					15
郷土の文化財、編集後記					16

特集

開かれた図書館をめざして

図書館は今、学校の内と外に向かってサービスを広げていこうとしています。今回の特集は“開かれた図書館をめざして”というテーマです。“開かれた”という言葉にはいろいろな意味が込められています。地域の利用者への図書館の開放、また、利用者が利用しやすいように時間を延長しての開館、さらに、図書館という建物の枠内の従来の図書館サービスを越えた、ネットワークを駆使した新たな図書館サービスの展開などです。そこで、この特集では「夜間・土曜日開館」、「一般市民への開放」、「インターネット」を取り上げました。

夜間・土曜日開館

夜間開館は平成2年度からスタートし、昨年度からは新たに土曜日開館も開始しました。長期休暇中を除く月曜日から金曜日までは午前8時30分から午後8時まで、土曜日は午前10時から午後4時まで開館しています。13ページの統計からも分かるように、夜間・土曜日の利用は着実な伸びを示しています。放課後の時間を活用して勉強したり、本を借りたりする学生たちでぎわっています。土曜日には、寮の学生が利用することが多いようです。

夜間・土曜日開館のために、アルバイトのみなさんが頑張っています。4年生の学生4人と、一般の方1人の5人（写真下）が2人づつペアを組んで勤務しています。主にカウンターでの貸出・返却や書架の図書の整理、パソコンへのデータの入力などの仕事をしています。昨年4月から今年の7月まで勤務してくれた電気工学科5年の橋口悟君は、「『図書館俱楽部』の編集委員をしていて図書館には特別な愛着があったので楽しく仕事ができた。一番大変だったのは返却図書の配架で、大きさ・厚さの違う本を何冊も持って館内を歩き回るのは大変でした」と感想を寄せてくださいました。

学生の皆さんには、放課後や土曜日の時間を使って、図書館を有効に利用していただきたいものです。



一般市民への開放

昨年度（平成9年度）から図書館を一般市民のみなさんに開放しました。現在までに50名近い方が利用登録されています。利用登録している人は、大牟田、荒尾両市の全域にわたっていますが、市中心部や有明高専の近辺の人が多いようです。利用登録をしている一般利用者へは、閲覧だけでなく貸出も学生や教職員と同じ条件でおこなっています。

一般利用者の利用動向を知るためにアンケートを実施したところ、調査・研究を目的とした利用が多く、また、専門書の利用が多いことが判りました。専門資料を多数備えた本校図書館の特色をよく生かして利用されているようです。また、要望点などを自由に書いてもらったところ、「市立図書館以外に一般市民が利用できる図書館がないので助かった」、「もう少し早く開放されていたらと思います」、「地域の図書館が18時で閉館になる中、18時以降仕事が終わってから利用できるのが良い」など、一般開放に好意的な意見が多数寄せられました。

また、資料に関しては、専門書、専門雑誌が豊富にある点が良いとする一方で、専門書、文芸書を問わず新刊書をもっと揃えて欲しいという要望が多く寄せられています。予算の許す範囲内で蔵書の充実を図りたいと思います。「検索用パソコンを使い易いものに変えて欲しい」、「自宅からも蔵書の検索ができるようにして欲しい」という要望もありました。来年度から、新しいコンピュータ・システムが導入されますので、この点については実現の見通しです。

施設面では、ロビーを喫茶室にしてはどうかという意見や、閲覧室をもっと開放的にして欲しいという要望が寄せられました。喫茶室は難しいかもしれません、開放的な明るい館内をめざして改善していきたいと思います。また、「閲覧室内での私語が多く長時間の利用に耐えられない」というご批判もいただきました。互いに迷惑にならないように努めたいものです。

本校が地理的に不便な場所に位置していることもあり、一般の方の利用はまだ活発とは言えませんが、アンケートで得られた意見を参考にしながら少しづつ改善し、地域の皆さんの一層の利用の促進を図っていきたいと思います。

インターネット

猛烈な勢いで発展しているインターネットは、1つの巨大な図書館と考えることもできます。普通の図書館と違う点は、インターネット上には有益な情報も、無益な情報もごちゃ混ぜになっており、普通の図書館のように情報がきちんと組織立てられていない点です。使いようによっては非常に便利な道具となりますが、使い方を誤ると何も得られないのがインターネットと言えるでしょう。

図書館ホームページ

本校図書館では、図書や雑誌のような従来の資料に加えて、インターネット上にある様々な情報も重要な情報源と位置づけて、その組織化に取り組んでいます。情報の大本原であるインターネットへの入口として、図書館ホームページを開設しました。有益な情報を探すための良きナビゲーターをめざしています。(図書館ホームページのURLは、<http://www.of.ariake-nct.ac.jp/lib/>)



本校図書館のホームページでは、図書館の使い方や、資料の探し方の解説の他に、インターネット上の各種の情報への入口を多数設けました。この中には、国内外の大学や他高専の蔵書検索システムや、次の項で詳しく解説する外国雑誌目次データベース、学術情報センターの電子図書館システム、各種の商用データベース（事前に利用登録が必要）などにリンクしています。また、出版情報が検索できる出版社や書店が提供するページや、各種のサーチエンジンへもリンクしています。本校で所蔵していない資料もこのリンクをたどって探すことができるでしょう。学外の情報にリンクするだけでなく、来年度からは本校図書館ホームページにアクセスすれば、国内外の大学や他高専からも本校図書館の蔵書検索ができるようになります。

本校で所蔵しない資料は、「申込」のページを使って、学外への文献複写の依頼や、学外からの図書の取り寄せの申込をすることができます。今まででは、申込用紙に記入して申し込んでいたのですが、申込のフォームに必要な事項を記入して送信ボ

タンを押すだけで申込ができるので大変便利になりました。国内の大学等の図書館で所蔵しない資料は、英國図書館文献提供センター（BLDSC）へも依頼できるようになっています。(学外への文献複写／現物貸借の依頼は教官のみ利用できます)「申込」のページではこの他に、図書館への情報検索の依頼やレンタル（調べもの）の依頼をすることもできます。

図書館ホームページを使って、インターネットという巨大な図書館を活用してみて下さい。

外国雑誌目次データベース

学術研究のためには、的確な情報収集が欠かせません。研究に必要な情報を網羅的に探索・収集するための道具として、従来からデータベースが使用されてきました。現在、いろいろな分野の様々なデータベースが提供されていますが、今年度から導入した外国雑誌目次データベースは、長岡技術科学大学が全国の高専にサービスしているデータベースで、外国雑誌の目次情報の速報性に力点をおいたデータベースです。理工系の他、生物・医学系、人文・社会科学系のコア・ジャーナルを含む主要な外国雑誌14,000誌の目次データが収録されています。1995年以降のデータが収録され、データは毎日更新されており、雑誌の最新号の目次情報を確認したりするのに大変役立つものです。(外国雑誌目次データベースへは本校図書館ホームページから接続するか、または<http://wwwdb.nagaokaut.ac.jp/>を指定)。

このデータベースの検索の仕方は、大きく分けて2通りあります。1つは、論文のタイトル中に含まれるキーワードや論文著者名で検索する方法です。この方法では、指定したキーワードや著者名を含む論文が、収録されている雑誌に関係なく検索されます。もう1つは、特定の雑誌をタイトルやISSNなどで検索し、その雑誌の特定の号の目次を表示させるものです。自分が調べたい雑誌の最新号の目次を確認したい場合に利用できます。

このデータベースの特徴として、選択的情報提供(SDI)サービスがあります。このサービスは、あらかじめ検索式を登録しておくことによって、データベースが更新されるつど登録した検索式で自動的に検索を実行し、その結果を自分宛の電子メールアドレスに送付してもらう機能(「検索式登録」と、あらかじめ雑誌のタイトルを登録しておくことによって、データベースにその雑誌の最新号の目次データが追加されるつど自動的に最新号の目次データを自分宛の電子メールアドレスに送付してもらう機能(「新着登録」)です。これらの機能を利用することによって検索する手間を省くことができるため、非常に便利な機能と言えます。

このデータベースは、本校の教職員・学生が学校内のコンピュータを使用してアクセスするならば、誰でも自由に使えますので、大いに役立てていただきたいものです。

読書感想文コンクールも4回目を迎えてこの催しますます盛んになっていくことを願っています。今回の応募数は540編でほぼ例年と同じ規模となりましたが、審査員の先生方の選評にもある通りに、上級生の作品に優れたものが数多く見られるようになり、この感想文コンクールの持つ意義が理解され着実にその成果が上がってきているものと嬉しく思います。ただもう少し上級生の応募数が増えてくれればとも思います。

今年も国語科の先生方の協力で、1年・2年に関しては、授業の一環に組み込んで頂きました。そして応募作品540編が集まりました。応募数としてはほぼ例年と同じ規模ですが、感想文の対象作品も増えて多様化の傾向が見られるのも今年の特徴かと思われます。

担任の先生による第1次審査で、まず96編が選ばれ、7名の審査委員による第2次審査、第3次審査

で、最優秀作1編、優秀作2編を含む入賞作品11編が選ばれました。最終審査に残った作品はいずれも力作揃いで、最優秀作を一つにしほるのに苦労したものです。ですから一応の決定は見たのですが、最優秀作品と優秀作品との差は全くの紙一重で甲乙つけがたいほどです。この紙上に掲載の作品を読み比べて下さい。

全学年と一緒に審査していると、さすがに学年間の力量の違いはいかんともしがたいと感じます。日頃の学習とともに理性と感性とが日々磨かれて、文章の力となって現れるのでしょうか。国語の授業で『鼻』なり『地獄変』なりで正確な読みを学びます。そして立派な感想文を書いた人もいるでしょう。そういう人達が上級生になって自分の目で選んだ作品について、また感想文を書いて次の機会には奮って応募して下さい。それをお待ちしています。

(図書館長 中本 潔)

入賞者

■最優秀賞

4年 物質工学科

田川 勇気 「地獄変」を読んで

■優秀賞

3年 建築学科

坂口 麻子 伊豆の踊り子

3年 建築学科

柳 聖子 「地獄変」芸術の昇華

■佳作

1年 電子情報工学科

田中 拓己 「高瀬舟」を読んで

2年 機械工学科

高井良祐美 こころ

2年 電気工学科

福山 祐佳 「鼻」を読んで

2年 電子情報工学科

松林美穂子 「斜陽」を読んで

2年 建築学科

宮崎 綾 華岡青洲の妻

3年 建築学科

曾我部寛子 春琴抄

4年 物質工学科

藤本 尊文 「地獄変」を読んで

4年 建築学科

坂上 美穂 「二十歳の原点」

入賞作品



「地獄変」を 読んで

4年 物質工学科
田川 勇氣

業火の中で焼けただれる娘を、ただにらみつけて筆を動かす良秀、この物語の一番の山場だ。この一見残酷のような行動が、なぜだか人の生き方を示しているようだった。

絵の才能にめぐまれているかわりに、良秀には何かが足りなかった。世間での評判は悪く、彼は横柄で高慢だと噂されていた。しかし、それが本当の良秀の姿だったのだろうか。きっと彼はそうではなかったと思う。彼の絵の才能をねたむ者が現れ、良秀に対する世間の目は冷たくなった。彼はこのままでは、娘にまでつらい思いをさせてしまう、そう思い強くなろうと考えた。しかし人は強くなると弱い人の気持ちがわからなくなり、やがては心の痛みに鈍感になってしまう。そうなることにより、世間はもっと冷たくなり、物語の良秀像ができあがってしまったのではないだろうか。この物語の語り手は、良秀について批判的だが、私はそうは思わない。そこに存在するのは純粋な心だ。純粋な娘への愛であつ

て、それを誰も否定することはできないのだ。

このように彼は、絵と娘を愛することで自分の存在価値を見い出していた。しかし、彼は絵と娘への思いが互いに大き過ぎるために、この二つをうまく扱えない不器用な人でもあった。良秀はきっと、娘の絵を描きたかったと思う。しかし、娘への愛の大きさと絵の技術がつり合わず心にしこりを残しつつ、いつも断念していたのだろう。こんな気持ちを、娘は察知していたのか、燃える炎の中で最後まで絵のモデルとなり続けた。父は娘を描きたいと願い、娘は父の夢を叶えたいという二つの願いが交わった点、これがあの、一見残酷に見える場面の裏側なのである。私は、ここに親子の愛を感じた。つまり二人は、自分が一番輝けるところを見つけ、しっかりと「自分」というものを見つけ、この答えを出したのだ。

今の時代、「自分」というものを見つけ出せずに、そのままあきらめてしまうことが多い。まだ私も私が自分らしくある場所を、見つけ出せてはいない。だから、二人がとてもうらやましくてしかたない。人として生きるために、私達は幸福になる権利がある。そのために、「自分」を見つけ出すことに全力をつくさなければならない。そして私達は、与えられた時間の中で精いっぱい生きなければならない。良秀のように強い信念と、純粋な心をもてば、きっと実現できる。



伊豆の踊り子

3年 建築学科
坂口 麻子

人は皆心にわだかまりを抱えて生きている。大きくふくれあがって心を押し潰そうとしたり、心の片隅に居座って憂うつにさせたりしてそれは私達を悩ませる。そんな心のしこりは個人によって、または時として大きさや形を変えるが、誰の中にも少なからず存在しているものだと思う。しかしそういった悩みにも、解決し消えてなくなる瞬間が訪れることがある。景色を覆い隠していた霧がすっと晴れていくように、心にかかったもやが消え、眞の自分が見えてくる瞬間があるのである。

一人伊豆へと向かう二十歳の青年も、最初は大きなわだかまりを背負って歩いていた。孤児という境遇の中で、その事実から生まれる過剰な自意識や劣等感に悩まされていた青年は逃げ出さないように旅へ出ていた。自身を「孤児根生で歪んでいる」と省みる青年は、自分の立場を真っ直ぐに見つめることができるとても眞面目でひたむきな人だと私は感じた。彼の正直な眼を通して物語を読んでいると、出会う旅芸人の一団も、その中の踊子も、また、通り過ぎる景色の一つ一つさえ眞っ直ぐに見

えた。自分を歪んでいると考える為、逆に清純な踊子に心を惹かれる青年。だがその踊子を想う気持ちこそ、純粋で、澄んだ心からくる清らかなものに感じられた。

宿の窓から夜の町を眺めながら青年は泣いた。踊子のいない、旅の最後の夜に彼は踊子を思い、旅芸人達の情を感じ、そして自分を考え涙を流した。青年にとって、「わけもなくほたほた落ちた」その涙はきっと、感傷と旅情によるものであったとともに、青年の心の汚濁した部分が拭い去られた証だったのである。この時点で既に、青年の前にかかる霧はもう消えてしまっているように私は思った。

旅芸人と別れ船に乗り、踊子が小さくなっていく様子を見終えた後、青年の眼から再び涙がこぼれる。その涙にはもう感傷はない。青年は目の前にたちこめていた霧がいつのまにか消えていることに気付き、眞の自分と向き合う時が来たことを知るのである。それは自分への第一歩であり、この旅が普段の生活からの「逃げ」だけではなかったというしるしであった。

青年を悩ませてきた心のしこりの消滅、自分への前進、それを助ける真摯な姿勢。生きていく上で必ずぶつかる大きな壁にどう向かっていくか。力まず素直に進んで行くことができるだろうか。読後、爽やかで前向きな気持ちを青年とともに感じることができ、自分の前にも存在する心のもやに、見て見ぬ振りはできないなと考えさせられる作品であった。



「地獄変」 藝術の昇華

3年 建築学科
柳 聖子

当時の社会的人間とすれば、堀川の大殿様は尊敬の対象であり、良秀は侮蔑の対象として見られている。良秀の奇行とその外見、容姿の卑しさは、人々の反感を買い、悪し様に言う人も多かったことだろう。

しかし、一つ道を一心に極めようとする彼を、私はあえて弁護してやりたいと思う。

彼は、絵に関しては、決して妥協を良しとしない。心底納得の行くまで、その絵筆を置くことが出来ないのである。鎖に縛られ苦しむ弟子、また、怪鳥にさいなまれ怯える童子。それら写実の対象と向き合い、スケッチする時に、彼の心は全て、それをいかに屏風絵の中に活かすかに向けられていて、弟子や童子をいたわる余裕を持たない。その時の良秀は、自己の芸術の世界に心身ともに浸っており、世俗の日常的な心配りなど、入り込む余地はないのだ。

その様な彼の、唯一現世の宝とも言うべき愛娘、それを大殿様によってこの世から奪われてしまう。いや、言い方を変えれば、彼の芸術を完成させるという美名の下に、目前に地獄と化して投げ与えられたのである。

彼は、上臍を車ごと火にかけるところを見たい、と

願った。そしてそれは、この世の何事も、意のままにならぬものはないという、驕り高ぶる大殿様により承知され、実現する。

車の中の女が、愛娘と知った時、良秀は思わず駆け寄ろうとするが、炎が燃え上がった途端、彼は事実、自分の欲したものをその中に見たのだ。

見知らぬ罪人の女であれば、ただ残酷な、惨い美しさのみで、弟子や童子と何ら変わらなかったかもしれない。しかし、炎の中に苦しむのは、我が愛娘である。彼はまさに、地獄を目の当たりにした。それは、藝術家としての彼が、焦がれてやまぬ程望んだものであり、その無限地獄の奈落へ自分とともに、真っ逆さまに落ちた。その時を期して、彼は完全に、浮世とは全く掛け離れた藝術の精神の世界へ昇華したのである。

まるで憑かれたように、一連の屏風絵を仕上げた後、彼が命を絶ったのも、何の不思議もない。彼はただ、絵を描き上げるためにのみ、己の肉体を残していたに過ぎず、地獄を見、地獄に落ちたあの時から、彼の魂もまた、彼の藝術の中に燃え尽きていたのだから。

大殿様は、良秀と比べれば、あくまで一介の俗人に過ぎず、良秀の藝術の、完成のための触媒に過ぎなかつた。全てが良秀と対照的なこの貴人は、きっと屏風絵を見た瞬間、己の負けを認めざるを得なかつたに違いない。

この両極端な二人の間に引き起こされた美しき惨劇を救っているものは、良秀の絵の見事な出来栄えと、哀れな子猿の存在であろう。貴族的傲慢と藝術的狂氣を繋ぎ止めて、人の心を動かすものは、ひたすら娘を慕う、子猿のつぶらな瞳でなのである。

くる。ここで重要なのは、羽田庄兵衛が読者と同じような立場だという事ではないだろうか。庄兵衛は、読者の代わりに喜助に対して浮かぶ疑問の数々を喜助に問い合わせているのだろう。

そして、この作品の重要な部々である喜助の罪、弟の安楽死については、見る人によって正しか間違った事なのかの感じ方はそれぞれだろう。弟は、ただ兄の足手まといになるのが心苦しくて死のうとした。喜助は苦しんでいる弟に頼まれ、弟の望むままにしてあげただけなのだ。僕は、この事件は別に、誰が悪いというものでなく、二人とも、相手の事を思っていた行動であって、二人とも後悔はしてなかったのではないかと思う。しかし、周りの人の考え方としては、何故弟を助けなかったのかというものが出来るだろう。つまりどんな物事でも一方から見ると一部しか見えないがいろいろな角度から見ると、さまざまな部分、さまざまな意見が出るという事が、この作品を通して作者が読者に語りかけたい事ではないだろうかと思った。



僕がこの『高瀬舟』という作品を読んで思ったことは、物の見方は一つではないということをこの作品を読むことによって改めて学んだ気がすることである。おそらくはほとんどの人が、庄兵衛と同じように、喜助の事を理解できないのではないかと思う。普通は悪い事が続くとマイナスの方ばかりを考えてしまう。しかし、大切なのは、全く違う方向から見る喜助のような考えを持つことではないだろうか。その物事をマイナスではなくプラスの方に考える事だと思う。それが、他人には不幸に見えたても、哀れで情けなく見えたとしても、今までと違う方向から物事を見てみる。するとそこから、今まででは見えなかった別の何かが見えるかもしれない。一つ確かな事があるとすれば、それによって、考え方などに変化が生じるということだ。

この作品の中で羽田庄兵衛は、喜助の言う意表をつく言葉の一つ一つに対して自分と喜助を比べている。罪人とそれを連れていく役人というように、一見、立場も何も似ても似つかない二人だけれども、見る角度を変えてみてみると、様々な共通な部分が次々と浮かびあがって



こころ

2年 機械工学科
高井良祐美

遺書、それは、ここまで長く書かなければならぬのだろうか。とにかく、「先生」が「私」にあてた遺書は大変長かった。だけどそれは、ただ長すぎるだけではなかった。その中には、ずしりと重くのしかかるものがあった。その質感は「先生」の過去がだんだんと明らかになってくるほど、増していくようだった。

遺書で明らかになった「先生」の過去、それは、悲劇という一言では言い表せないものだった。そもそも、この悲劇は「K」に同情を抱いた「先生」が彼を自分の下宿先に引き入れた事に始まった。下宿先には、家主の奥さんとお嬢さんがいた。つまり一つ屋根の下に、二人の青年と娘が一緒にいるということになる。現代で考えれば、このような事は、別にそう大した事ではないかも知れないが、明治という時代では、一般には考えがたい事だと思う。そして、お嬢さんに青年二人が恋心を抱くようになり、さらに悲劇の足音が近づいて来たように感じた。この三角関係に耐えきれず最初に動いたのは「K」で、それを知つていながらも、お嬢さんとの婚約を申し込んだのは「先生」だった。それには、もはや悲劇を越

えるものがあった。

そして「K」の自殺。この時「先生」は、何とも言ひようがない苦痛を感じたに違ひない。また同時に、昔、信頼していた叔父に欺かれた時に生じた、人を信じられなくなった気持ちと、友を自分が裏切ってしまった事、つまり、今度は自分が人を欺く立場になってしまい、本当に苦しくて、居心地の悪い思いをしていたに違ひない。なぜなら、自分自身が悪人になってしまったのだから…。

このように変わり果てた容姿と気持ちで何年も過ごしてきた「先生」にとって、「私」はあの事件以来、初めて信用できた人だったに違ひない。なぜなら、今まで最愛の妻にでさえも明かそうとしなかった過去を、「私」には打ち明けたのだから。信用できる人に過去を明らかにすることでできた「先生」は、後は「K」を償うだけだと考え、自殺したのだと思う。過去を明らかにした事で、きっと自分の気持ちを整理する事ができたのではないだろうか。

「K」の死、そして「先生」の死、私にはこの二人の死は少し重すぎた。「先生」の人生観についても、世の中を考えさせられるものがあった。世の中の真暗い場面に立った時、逃げ出さずに少しずつでもいいから前進して行く事ができるようになる事は、すばらしいと思う。そうできるようになる事が自分の人生を送る上で重要な鍵となるのだろう。きっと、今の私には、そんな事はまだ出来ない。逃げてしまうのが先だろう。将来、面と向かって暗闇の中で立ち向かえるようになった時、本当の自分が出来上がる事を願つて歩んで行きたい。



「鼻」を読んで

2年 電気工学科
福山祐佳

人間誰もが持っているもの、それがコンプレックスである。ことに容貌に対するコンプレックスはどうしようもない。自分が何かした訳でもないのに周囲に対して劣等感を背負わなければならないからだ。人はそれを克服するために、化粧をし、服装を工夫し、時には何かを犠牲にしてまで様々な努力をする。そこまでして人間は、他人と「平等」でありたいと強く願っているものなのである。

私は小さい時から数あるコンプレックスの中でも、特に歯並びが悪いことを気にしていた。しかし私も成長するにしたがって、そんなことを気にならない人もいるのだということに気付いた。このようにして私はコンプレックスを「気にしない」ことで克服することができたのである。しかし内供の場合は違う。何せ大きな鼻だ。気にならない人がいる訳がない。「気にしない」でごまかされるものではないからだ。そうするとこれを克服するにはやはり鼻が小さくなるしかないと思うのだが実際に小さくなつた時、人々の態度は以前にも増してひどくなってしまった。著者はこの原因を「傍聴者の利己主義」という見方で捕らえていた。こういった他人を顧み

ない利己的な考えは日常にもごろごろしている。この話について言えば、初め人々は内供の鼻に対し馬鹿にするよりもむしろ同情心に近い感情さえ抱いていた。でもそれは内供が変わった鼻を持つという面で自分より劣ると思っているからそんな感情が生まれるのだ。だから鼻が小さくなつた途端今まで後ろにいた者に追いつかれたような気分になり急に相手が憎らしく思えてくる。この矛盾した感情はぶつかり合うことなく一つの心の中に存在するのだ。これを読む人はつくづく根のところでは自分が一番大事なのだ、と思う。どんなきれいごとを言っても私達は自分のためにしか生きられないのだと。例えば誰かのために何かするにしても、それは自己満足のためだし、もしかしたらどこかで見返りを求めているかもしれない。内供への態度が急に変わったのはそれまで彼に対して持っていたある優越感のようなものを失い、心の余裕がなくなつたからだと思う。また人は大勢集まるときの感情を表すようになるものだ。これらの気持ちは人間なら誰でも持っている。でも同時に人は、プライドや思いやりというそれに屈しない感情も合わせ持っている。だからこそ人間は素晴らしいのだ。周囲に惑わされることなく感情を自制できるようになって初めて、人は一人前になれるのかもしれない。

鼻は結局また元に戻ってしまうが彼はもう鼻が短くなる前の内供ではない。彼は彼なりにコンプレックスを克服したのである。それはもしかしたら、「鼻の大きいのがなんだ」と笑い飛ばすことの出来ない内供のために仏様が授けた、一つの小さな出来事だったのかもしれない。



「斜陽」を読んで

2年 電子情報工学科
松林 美穂子

『斜陽』このタイトルが目に入って思い浮かんだのは、川のむこうに沈んでいく夕陽の姿だった。日が傾き、徐々に光が赤く西の空を染め、優しいオレンジ色の光が町を包んでいく。この時の夕日の姿を見ていらるるのは一日の長さからいえばほんの一瞬でしかないが、私はその夕方の陽の光が好きで、よく近くの川まで眺めに行くことがある。

力強い太陽の輝きがやわらかくなり、美しく消えていく。その様子から、「斜陽」というのは衰えていくものを目指すこともあるという。その意味通り、この作品には人々の生き様と減びが描かれていた。

物語の舞台となっているのは、没落した貴族の家庭で、「かず子」の目を通した「母」、弟の「直治」の生と死、彼らの思想が描き出されている。それぞれの人生はまさに十人十色で、みな生き方や死に方で自分の道を貫こうとしていた。

没落してもなお、貴族としての高貴さを失わない母は、自分の子どもに深く愛情を注いだ。生活が苦しくても娘のために貴族としての生活を選び、麻薬漬けになつた息子に心を痛めた。やがては結核にかかり、死んでい

く。かず子は母に憧れや理想を重ね、すさんだ直治でも敬い、大切に想つたのが母だった。

直治は母が死んだ後、遺書を残して自ら命を断つ。それは貴族であるという苦しみから逃れようとした選択だった。私には、どうして直治が麻薬や酒に手を出し、落ちぶれた生活を送るのか理解できなかった。しかし、その死をもって直治が人としての魂を捨てていなかつたのがよくわかった。強さを求めて貴族であることを捨て、家族を拒否することで民衆へと近付こうとしたのだ。

私は、ひどい生活をする直治を見放さない母親が不思議だったが、母はこの直治の苦しみに気付いていたからなのかもしれない。直治が本当は家族思いの優しい心を持っていましたともわかっていたに違いない。

かず子は革命思想を持ち、恋を求めて作家の上原に近付いていく。唯一生き方に執着した人物だ。ある人に密かな恋心を抱きつつも自殺した直治とは対照的に見えて、実は二人は同じ土台の上にかみ合つたパズルのピースのようだと思った。その土台こそが、かず子が興味を持った「破壊思想」にほかならない。

美しく生きるために、美しい減びを求める人々のおりなした様は、一瞬の斜陽の光が永遠に続きそうに思われるような、穏やかな悲愴感にあふれている。

私たちが生きている現代は、居場所がないと感じる子ども達や、生きている意味を見失った大人が増えているといわれている。そういう中で、「減び」に向かうこととは違う、自分の存在意義を見つけ出して生きていくことが私たちへの課題ではないだろうか。



華岡青洲の妻

2年 建築学科
宮崎 綾

愛する人の役に立つという事は、とても素晴らしい事だ。そしてその事がもっと多くの人々を助ける事になったなら、これ以上良い事はないだろうと思う。しかし、それが自分の命の危険を伴うものだったらどうだろうか。

医者である青洲の母、於継と、妻、加恵は何を思つて彼の為に薬を飲もうと考えたのだろうか。未完成の麻酔薬は、一歩間違えば命を奪う毒だ。それなのに、何故彼女達は自分一人だけを実験に使う様にと願つたのだろう。互いに相手の命を庇い合い、犠牲を自分だけにしようという争いは、一見美しくも見えるだろう。しかしその裏は、嫁と姑の醜い、愛情の奪い合いではなかつたかと思う。母は子を自分だけのものにしたいと思い、妻は夫を自分だけのものにしたいと思う。その様な愛する人の奪い合いが、私には悲しく感じられた。誰かを愛する気持ち、その表現の仕方は、人によって様々だ。激しい独占愛に生きる二人の女の争いは確かに醜い。しかし私は、それも一つの愛情表現なのだと感じた。自分の身の危険を犯す事で愛を勝ち取る事が出来るのなら、それでも良いと思う二人は、本当に青洲を愛していたのだと思う。

青洲は結局、どちらにも実験を行う事に決めた。その時私の心には、何故という思いが湧いていた。青洲は母も妻も大事に思つてゐるはずだった。それなのに何故だろうと。そう、そこには愛する者を危険から守ろうとする男ではなく、一人の医者が居るだけだった。彼は医者としての欲望を通す事を決意したのだ。彼にとって、癌を治療する為の麻酔薬を完成させる為に、人体実験とは越えなければならない壁であったのだ。

しかし、実は彼は妻にしか本当の実験を行わなかつた。それは彼が母親の方をより強く愛していたからだろうか。だから危険な事をさせたくなかつたのだろうか。私は、全く反対だと思う。妻を愛していたからこそ、この実験が出来たのだ。成功すれば、今まで治らないと言つていた癌を治す事が可能になるかもしれない。そんな大事な実験を愛する妻と行った事で、実験後の彼の喜びは一層大きなものになつたはずである。そして、副作用で盲目になつた妻を、彼は以前にも増して誰よりも愛する様になつた。

愛とは悲しみの中で生まれるべきではない。しかし、悲しみによって愛情が深められる事もある。自分の為に何かを失い、それを本望だと言う人を愛しいと思うのは、彼だけではないだろう。

私は愛する人の為に死ねるだろうか。何かを失う事も恐れない程に人を愛する事が、果たして出来るだろうか。私にはまだわからない。だがそんな愛に憧れを抱き、求めている自分が、きっと何処かに居るのだと、私は今感じた。



春琴抄

3年 建築学科
曾我部 寛子

春琴と佐助は師匠と弟子の関係にあった。男女というのは対等であるべきで、どちらかが優位にあるなどとは考えられなかつた。しかし春琴抄を読んでいくにつれて、不思議と自分の理想に対する違和感が消えていった。

春琴に仕える身であった佐助はただ忠実に彼女に尽くした。側においてもらうことを感謝し、春琴を愛しているにも関わらず見返りは求めないし、自己満足があるわけでもない。佐助の愛はあまりにも真っすぐだ。春琴に対する欲などないのだ。私はそんな佐助を人間らしくないと思った。どうしてそこまで一人の女人をずっと想い続けられるのか。春琴は確かに「端麗にして高雅」で、音曲の才能も秀でていたが、性格は我儘で粗暴で思いやりに欠ける。しかし佐助は春琴や自分の愛に対して疑うということを知らない。迷わない、欲がない、疑わない。佐助のひたむきな愛にはつくづく感心した。佐助ほどの「無償の愛」は真似などできないからだ。もしかしたら、佐助が人間らしくないのでなく、人が誰かを

深く愛し抜いたとき佐助のようになれるのかも知れない。

それに対して春琴はなんと不器用だろう。事実上夫婦でありながらそれを認めようとせず、自分の気持ちを出そうともしない。私はつくづく春琴がわからなかつたが、佐助が自分の目をつぶしてまで盲目になったときの彼女の言葉を聞いて、かたくなな態度の謎が解けた気がした。春琴は佐助を信頼していたものの、やはり自分が盲人であるということに引け目を感じていたのだろう。目の見えない不安と他人に負けまいとする気持ちのせいで、佐助にさえも完全に心を委ねることができなかつたのだ。しかし誰よりも佐助と対等でありたかったのは春琴自身ではなかつただろうか。「傷付けられた今の顔をお前にだけは見られたくなかった。」という言葉は本当に素直になった心からの想いだと感じた。

普通に考えれば、わざわざ盲目になるなど異常な行動であるし、許されないことだ。しかし、この二人の場合だけはそれはまちがつてはいなかつたと思う。そうまでしてようやく二人は同じ世界に住み、本当の意味で対等になれたのだ。表向きは死ぬまで師弟関係にあつたが、それが普通の夫婦とどう違つてゐるのか。二人の中の信頼はそんなことに関係はないほど固く、そして確かな絆がある。他人にはわからないが、彼ら二人は師匠と弟子という形で完全に成り立つていただけなのだ。佐助は一生涯かけて春琴をひたすら愛した。春琴は疑う余地などないほどに愛された。そんな二人が幸福だったということに変わりはないだろう。



「地獄変」を読んで

4年 物質工学科
藤本 尊文

「地獄変」を一度読んでみただけでは、私は良秀の生き方に納得することができなかつた。いくら絵が大切だといっても、最愛の娘までも犠牲にしなければならないのか、と。

しかし、二度三度と本編を読み返すと、その考えはまちがっていると感じた。良秀の生き方をうらやましく思えた。誰からも人として認められず、唯一つ認められた絵のために悲しいほどの情熱をそぞぐ一直線な人生。それはとてもすばらしくもあり、悲しくもある。

自分が与えられた仕事にそこまで命をかけて取り組むという良秀の姿には男としてみならわなければならない所があると思う。しかし、絵を描く良秀は、完全に自分を見失っている。それは愛娘の死という現実に気付かないほどである。娘が炎に焼かれている時、その娘を絵の一部としてしかとらえることができなかつた。この良秀の姿は純粋としかいいようがない。

物語中の語り手によると、良秀は横柄で高慢、どうしようもない人間とあるが、それは良秀自身が他の何よりも絵を描くということに情熱をそぞぎ、また自信と誇りを持っていたからだと思う。それが絵師としての良秀である。こんなにひどい言われようの良秀も、娘に対して

だけは優しかった。父親としての良秀である。このように良秀は、絵師としての自分と父親としての自分と違いすぎるほどの二面性をもつていたのだと思う。

確かに絵師としての良秀は愛娘の死に直面してもそれを絵という形でしか表現することができなかつた。しかし、それでいいと思う。父親としての良秀は自殺という形で愛娘の死を表現した。そこに良秀の父親としての愛情と人間としての情が感じられる。良秀もやはり絵師である前に父親であり、そして人間だったので。しかし自殺ということでしか愛娘に父親としての愛情を示すことができなかつた良秀に同情もあり哀れだと感じる。

もし自分に何か他の人よりもすぐれた才能があったとしたら、何を失ったとしてもそのことを昇華し、そのために生きようと思うかもしれない。いや、きっとそう思うだろう。だから、誰も良秀を責めることなどできなないし、共感こそそれ非難できないと思うのだ。

良秀自身、直接的ではないにしろ愛娘を死なせてしまったことに対してかなり大きな後悔と責任を感じていたと思う。愛娘を目の前で失うという地獄を見てしまった今、絵が描けなくなってしまったのかもしれない。もうこの絵以上のものを描くことができないと思ったのだろう。だから自らの命を絶った。そこには大きな意味が含まれていたのだと思う。

人の生き方で、何が幸せと呼べるのかは自分自身にしかわからない。こういう風に不器用で、一途で一直線な生き方しかできない良秀だからこそ、哀れだとと思う以前に彼の生き方に共感し彼に対して親しみを感じるのだ。



「二十歳の原点」

4年 建築学科
坂上 美穂

私は、来年で二十歳になる。二十歳とは私の中で一つの大きな転機であり、この題名である「二十歳の原点」という言葉から、私は何か不思議な力を感じとった。

主人公である高野悦子さん。彼女は、二十歳の誕生から一生を終えるまでの約半年間日記を書き続け、自らの手でこの世を去った。そこに残ったものとは、一体何だったのだろうか…。私にはわからない。彼女を死においやるまで苦しめたその気持ちが…

確かに、現代の日本には学園闘争が起こっているなどとは耳にしない。かといって、今現在の学校生活に満足しているのか。と問われるならば、答えを出すのに時間がかかるであろう。

学校とは果たして何なのか。学生証という紙切れ一枚によって支配され、眠っていても講義は進められ、気がつけば一日が終っている。唯一楽しい事といえば、昼休み友達同士で弁当を囲みながら話がはずみ、ほんのわずかな時間。

彼女は、そのような時間さえも知らなかった。幼い頃

から優等生であり、そのためか周囲の人からは、可愛がられ、非難を浴びずに育ってきた。しかし、大学での闘争をまの当たりにし、どう対処すればよいのかわからなかった。言いかえれば、ただ闘争から逃げだしたいだけであった。私も彼女の立場から考えると、闘争に対して何のかかわりもなく、日本帝国にしたがった人形の様なものであったであろう。

しかし彼女は変わった。自分が今何をしなければならないのか、どう行動すべきなのかに気づいたのだった。私は、その時彼女が大人に見え、たくましささえも感じた。

それから彼女は、学園闘争に参加し、自由と平等を取り戻すため戦い挑んだ。これが、彼女にとって原点であったのであろう。

最終的に、この原点に立つと同時に彼女は命を絶った。しかし、後悔はないであろう。自分の考えに前向きに行動できたのであるから。

私は、ふと我にかえる。私は自分の考えを幾度となく隠してきた。いや、隠してきたのではなく、自分の考えに自信がなかったのかもしれない。

「原点」まで、私はあとどれくらいであろう。原点を越えたら、自分の考えに忠実になれるとは限らない。原点を迎えるために、自分自身成長しなければならないのではないか。

彼女が残したものとは…、私には、まだわからない。しかし、原点に到達したその時、きっとわかることであろう。

審査を終えて

一般教育科 国語 焼山 廣志

読書感想文コンクールの審査委員をするようになって今回で三回目になります。毎回の事ながら有明高専生の感性の豊かさに驚かされます。このコンクールに出品された文章一編一編を読みながら、審査する立場も忘れ、「ああ、こういう読み方もあるのか」と自分の固定化した思考を猛省した事が度々です。今回は特に上級生の作品に高専生の底力を見た思いがしました。

一般教育科 国語 岩本 晃代

今年は、上級生の活躍が目立ち大変嬉しく思いました。また、最終選考には、芥川龍之介の作品について書かれたものが多く残ったのも、印象的でした。作品の登場人物と、現在の自分を重ね合わせながら、「生きる」ということの厳しさと素晴らしさについて深く追求した跡が、どの感想文からもうかがわれました。

一般教育科 社会学 山口 英一

一昨年の審査に参加した経験からの講評です。今年は感想文の対象になった本が非常に多彩になっていました。特に上級生ではその傾向が強くなっています。同時に「自分が感じたこと」を表現する力が、かなり向上しています。

一般教育科 英語 中本 潔

国語科の先生方の指導のお蔭で感想文コンクールが益々盛んになって行くことを嬉しく思います。このうえは上級生の応募作が多くなってくることを期待してい

ます。本年度も力作が揃って最優秀作品を一点に絞るのに審査委員一同苦労したほどです。

一般教育科 ドイツ語 瀬戸 洋

今年は対象作品がバラエティに富んでいたのが印象に残った。低学年は「鼻」「地獄変」など教科書に載っているような短編が多くあったが、3年生は「少年H」「もの食う人々」などいま話題のかなり読み応えのある本を扱ったものがあり、うれしく思った。これからもいろいろな機会にいろいろな作品を読んでもらいたい。

電子情報工学科 石井康太郎

感想文の読者に対してある程度の内容紹介は必要ですが、行き過ぎれば単なる図書紹介になります。私が重視したのは、自分のしっかりした考えがあるか、文章は分かりやすいか、ということです。これが満たされた感想文は、一つの『作品』のように思われました。

物質工学科 正留 隆

本校の読書感想文は原稿用紙3枚以内と短いので、この中に自分の考えをまとめて書くことは大変であったと思います。もちろん文章のうまい人もいればそうでない人もいますが、読書感想文の出来から全体的にまじめに取り組んでいたように思いました。来年度はもう少し上級生の感想文を多く読んでみたいと思いますので、どうか上級生のみなさん読書感想文コンクールにたくさん応募して下さい。

図書館俱楽部から ~ブックハンティングの紹介

私たち図書館俱楽部編集委員は、主に「図書館俱楽部」の発行と、年に二回ブックハンティングと称した図書購入を行っています。

図書館俱楽部の発行についてとても悩むのは記事の編集です。読みやすい文章を書くことはとても難しいです。また、その記事をどのように配置するかでも悩みます。これらの作業は、全員で検討をしながら行っているので時間がかかります。

しかし、編集だけではありません。購入する図書を選ぶ時にも悩まされます。それは、自分の興味だけで選ん

でしまってはいけない点です。自分には興味があるても、周りの人に興味がなかったら、購入した意味が無くなります。この作業も時間をかけてじっくりと選んでいます。

この他にも、特集記事の取材やカット選び等大変な作業があります。ですが、複数の人で話し合いながらこれらの作業を進めているので楽しい時もあります。これからも、今まで以上に努力していきたいと思っています。

(図書館俱楽部編集委員長 2M 長尾一也)

平成10年度 第1回ブックハンティング図書

	著者名	書名	出版社名
1	村上春樹	アンダーグラウンド	講談社
2	シドニー・シェルダン	氷の淑女（上）（下）	徳間書房
3	堺屋太一	「次」はこうなる	講談社
4	村上龍	夢見るころを過ぎれば	リクルートダヴィンチ編集部
5	桐野夏生	錆びる心	文藝春秋
6	渡辺浩司	アンドロメディア	幻冬社
7	ドロンズ	ドロンズ日記 Part.4.5	日本テレビ放送
8	馳星周	不夜城	角川書店
9	ダニエル・スティール	二つの約束（上）（下）	アカデミー出版
10	鈴木光司	ループ	角川書店
11	中場利一	岸和田少年愚連隊	本の雑誌社
12	片山修	本田宗一郎からの手紙	文藝春秋
13	西澤潤一	「技術大国・日本」の未来	朝日新聞社
14	長山淳哉	しおりよるダイオキシン汚染	講談社
15	立花隆	宇宙からの帰還	中央公論社
16	なすび	懸賞日記（1）（2）	日本テレビ放送
17	藤本フサコ	忘れぬ子どもたち	不知火書房
18	村上春樹	1973年のピンボール	講談社
19	飯田譲治、梓 河人	アナザヘヴン（上）（下）	角川書店
20	岩井俊二	ウォーレスの人魚	角川書店
21	テリー・神川	「赤毛のアン」の生活事典	講談社
22	赤川次郎	本は楽しい	岩波書店
23	田中芳樹	炎の記憶	東京書籍
24	小林泰三	玩具修理屋	角川書店
25	ヨースタイン・ゴルデル	鏡の中、神秘の国へ	日本放送出版協会
26	永沢まこと	旅でスケッチしませんか	講談社
27	シブサワ・コウ	爆笑エジプト神話	光栄出版
28	フランチェスコ・アルベローニ	借りのある人、貸しのある人	草思社
29	天樹征丸	金田一少年の事件簿	講談社
30	連城三紀彦	年上の人	中央公論社
31	瀬名秀明	ブレイン・ヴァレー（上）（下）	角川書店
32	郷ひろみ	ダディ	幻冬社
33	爆笑問題	ビーブル	幻冬社
34	フランチェスコ・アルベローニ	他人をほめる人・けなす人	草思社
35	赤川次郎	散歩道	光文社
36	ラリィ・ニーヴン	リングワールドの王座	早川書房
37	シブサワ・コウ	爆笑ヴァンパイア	光栄出版
38	A. R. A	復習の手引	ワニブックス
39	松谷健二	旅する石工の伝説	新潮社
40	有野有三	発掘あるある大事典	扶桑社
41	よみうりテレビ	サルでもわかるニュース	実業之日本社

図書館統計

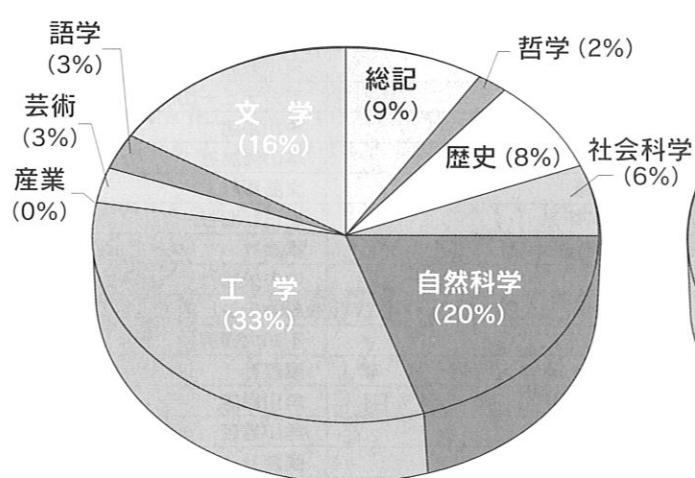
1. 藏書統計

藏書構成

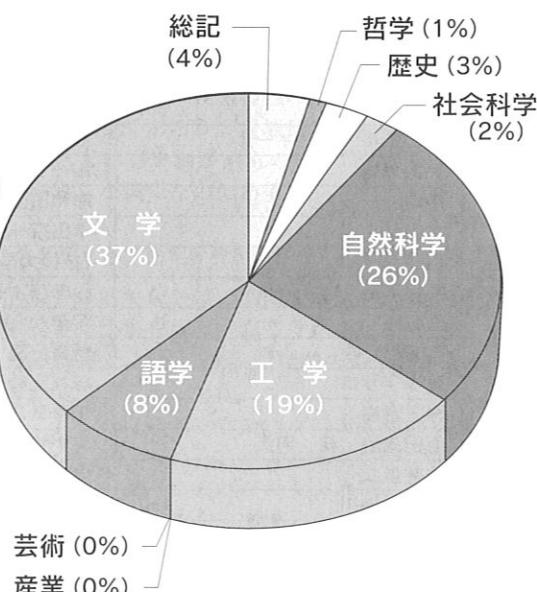
分類		000	100	200	300	400	500	600	700	800	900	合計
		総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	
図書の冊数	和	5,350	1,541	5,015	3,862	12,393	20,263	272	1,956	1,745	10,179	62,576
	洋	269	48	202	134	1,858	1,369	3	28	552	2,775	7,238
	計	5,619	1,589	5,217	3,996	14,251	21,632	275	1,984	2,297	12,954	69,814
雑誌の種類数	和	16	2	3	7	20	74	0	14	4	12	152
	洋	3	1	9	1	2	31	0	0	3	2	52
	計	19	3	12	8	22	105	0	14	7	14	204

(平成10年3月31日現在)

図書分類別蔵書割合「和書」



図書分類別蔵書割合「洋書」



2. 平成9年度利用状況

開館日数 275日

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
開館日数	18	25	24	26	21	23	26	22	23	22	23	22	275
入館者数	4,150 (内夜間) (内土曜日) 1日平均	7,422 (1,093) (234) 230.6	8,716 (1,150) (253) 296.9	6,217 (553) (150) 363.2	2,572 (0) (0) 122.5	8,518 (1,077) (214) 370.3	7,388 (862) (227) 284.2	5,303 (1,008) (272) 241.0	7,828 (858) (244) 340.3	5,575 (667) (177) 253.4	7,622 (1,109) (296) 331.4	3,354 (41) (0) 152.5	74,665 (8,601) (2,116) 271.5
貸出冊数	総数 (内夜間) (内土曜日) 1日平均	334 (99) (14) 18.6	496 (241) (48) 19.8	529 (124) (10) 22.0	516 (117) (22) 22.0	114 (0) (0) 5.4	368 (114) (19) 16.0	472 (78) (20) 18.2	485 (63) (39) 22.0	431 (85) (22) 18.7	611 (105) (32) 27.8	580 (110) (59) 25.2	159 (3) (0) 7.2
													5,095 (1,139) (285) 18.5

3. 過去5年間の利用状況の推移

分類別図書貸出冊数

年 度	総 記	哲 学	歴 史	社 会	自 然	工 学	産 業	芸 術	語 学	文 学	合 計
平成5年度	160	51	50	33	763	1,599	2	312	24	530	3,524
平成6年度	143	60	49	47	706	1,979	8	390	50	815	4,247
平成7年度	197	118	195	128	851	2,289	15	696	86	1,668	6,243
平成8年度	215	125	235	264	1,141	1,992	100	530	57	1,720	6,379
平成9年度	310	112	97	106	896	1,926	68	412	57	1,111	5,095
平均	205	93	125	116	871	1,957	39	468	55	1,169	5,098

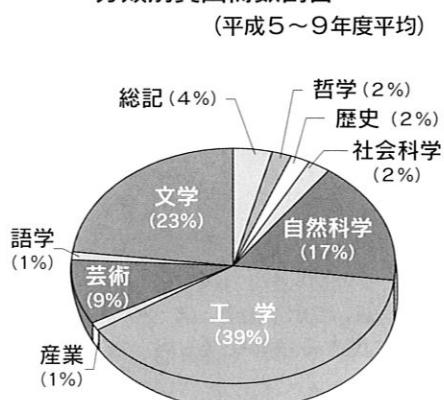
利用状況

年 度	利用者数 (内学外利用者) **	開館日数	入館者数総数* (内夜間・土曜日)(内学外利用者) **	貸出冊数総数 (内夜間・土曜日)(内学外利用者) **	1日当たり 入館者数*	1日当たり 貸出冊数	1人当たり 貸出冊数
平成5年度	1,194	245	9,715 (2,263)	3,524 (1,063)	40	14.4	3.0
平成6年度	1,192	238	69,974 (4,876)	4,247 (1,020)	294	17.8	3.6
平成7年度	1,220	240	73,384 (5,900)	6,243 (1,616)	306	26.0	5.1
平成8年度	1,225	244	62,730 (9,380)	6,379 (1,865)	257	26.1	5.2
平成9年度	1,254 (38)	275	74,665 (10,717) (98)	5,095 (1,424) (194)	270	18.4	4.1

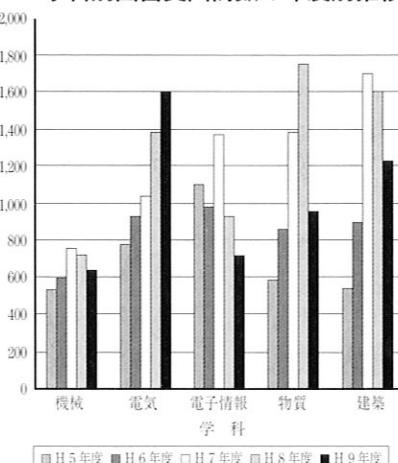
* 平成5年度は自己申告による数値、平成6年度以降は自動計測機により計測した数値である。

** 平成9年度から一般市民への開放を開始した。

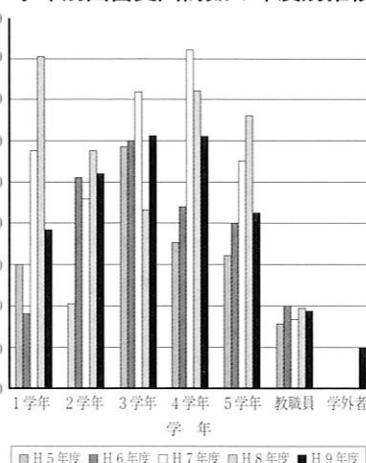
分類別貸出冊数割合



学科別図書貸出冊数の年度別推移

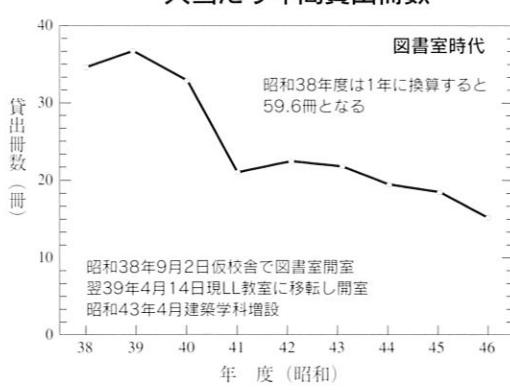


学年別図書貸出冊数の年度別推移

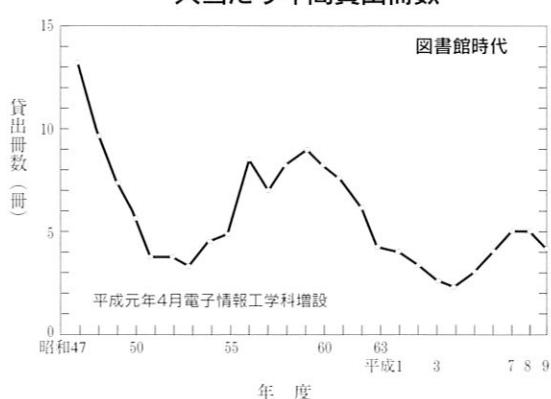


4. 創設時からの一人当たり貸出冊数の推移

一人当たり年間貸出冊数



一人当たり年間貸出冊数





館長挨拶

図書館長 中本 潔

十月に秋田市で行われた第84回全国図書館大会に図書館主任の村岡先生と一緒に参加する機会を与えられました。全国各地から学校図書館や地域図書館の関係者が集う有意義な大会で、『新たなる図書館の可能性を求めて』のテーマのもとに講演・報告・討論が行われました。情報化の時代と言われる現代にあって、知識の宝庫たる図書館はどう変わるのか。図書館は一体どうあるべきなのか。本校図書館の未来像は？いろいろ考えさせられる三日間でした。特に分科会で一緒になった高専関係の教職員の方々の熱意には圧倒される思いで、いろいろな知識を吸収できて有難く思っています。

今年度より図書館主任の制度が導入されて数学の村岡先生が情報処理センターと連携を取りながらその任に当ることになりました。本校図書館も来るべき電子図書館化への布石として準備に取りかからなければなりません。電算化、情報化の面で立ち遅れ気味であった本校図書館にも「図書館電子計算機システム」の導入が決定され、機種の選定も終り、来年度から運用開始されることになりました。現行のシステムでは閲覧業務とか目録業務の一部しか電算化されていないのですが、新しいシステムに代わることにより図書館業務のはほとんど全

てをカバーすることになります。現行の閉鎖的なシステムと違って、新システムでは、校内LANと接続して図書館蔵書データを校内外に公開することができます。ネットワーク上に公開して研究室の先生方はもちろん、広く校外の利用者にサービスの便をはかることができ、これぞ図書館も地域連携推進センター設立の趣旨の一翼を担うことができるようになります。同時にネットワーク上でつながっていて、他の図書館の蔵書を利用したり、学術情報センターの利用により図書館業務の画期的な改善をはかることができます。

このように図書館における利用者サービスの面における改善は着々と整いつつあるのですが、肝腎要の図書館蔵書の活用・情報の利用という点になるとどうでしょうか。歴代の図書館関係の教職員の方々がこの点にこそ随分努力を傾注してこられたと思います。最近とみに「活字離れ」が云々される時勢ですが、だからこそ一日ごろの授業を通しての読書指導や図書館資料利用の指導に力を入れて行く必要があるかと思っています。幸い読書感想文コンクールも四回目を迎えて、優秀な作品が揃い図書館の行事の一つとして定着してきました。課題図書を読んだ人、感想文を書いた人、選には入った人、全ての人が一度しかない貴重な学生時代にさらに進めて自覚的な読書を通じて自己の修練に努めてもらえばと思います。

大牟田市美術協会の御好意で図書館美術ギャラリーの作品の入れ替えが行われ、今までとは違った雰囲気を味わうことができます。素晴らしい芸術作品に接し心を鎮めたら、その足を図書館に向けて下さい。



全国図書館大会に 参加して

図書館主任 村岡 良紀

10月21日(火)～23日(金)にかけて秋田市で開催された全国図書館大会に図書館長の中本先生と共に出席してきました。高専図書館に共通する話題は「図書館コンピュータシステム」および「インターネット」に関するものでした。

インターネットの急速な普及による図書館の蔵書データベースの公開および校内LANへの接続、学術情報センターの目録所在情報サービスへの参加、図書館業務のシステム化等の要請から、ここ数年高専図書館では新コンピュータシステムの導入が進んでいます。本校図書館では、来年度新コンピュータシステムの導入が決定し、現在平成11年度からの新システムによる運営を目指した導入作業が進行中です。図書館大会では先行図書

館と新システムへの移行に関する情報交換を行いました。また、平成16年度からの学術情報センターのシステム変更に対する対応法に関する情報交換も行ってきました。

2日目高専分散会の講演「技術科学大学からみた高専の図書館」において、高専図書館の研究図書館としての側面に対し以下の提案がなされました。

現在各高専は平均74誌の外国語学術雑誌を購入している。一方、近年の学術雑誌の高騰は図書館予算・研究費の削減と相まって購入打ち切りの主要因となってきている。今後学術雑誌の電子ジャーナル化が進むことが予想されるため、高専全体または各地区ごとに電子ジャーナルを共同購入しネットワークによる共同利用が考えられ、長岡技術科学大学では試験的に学術雑誌の一部を電子ジャーナルの形で東京工業大学と共同利用している。ただし、この方法にはサーバの管理、電子ジャーナルの値段がまだ落ちていない等の問題点が残っている。

新システムの移行が進んでいる現在、研究図書館としての機能維持・強化につながるこの提案は今後の検討課題にしていきたいと思います。



書館がらの INFORMATION

○図書館でビデオ、CD-ROMを利用できます

図書館にビデオ装置2台を置きました。図書館備え付けのビデオをご覧になれます。専門学科のビデオ教材や留学生向けの日本語教材、高専祭、体育祭のビデオなどを備えつけています。

また、閲覧室に設置したパソコンで、CD-ROMの検索ができます。「理科年表CD-ROM」「世界大百科事典」が利用できます。

○書庫が利用しやすくなりました

書庫の中の資料を整理しましたので、利用しやすくなっています。雑誌や新聞のバックナンバー、教官から返却された専門図書などを置いています。自由にご利用ください。

○図書館ホームページを開設しました

図書館ホームページでは図書館の利用の仕方や資料や文献の探し方を詳しく解説しています。図書館を有効に活用する上でご活用ください。また、図書館に対しての学外への文献複写の申込やレファレンスの申込などもホームページ上からできるようになっていますのでご利用ください。詳しくは「特集ページ」をご覧下さい。

図書館ホームページのURL

<http://www.of.ariake-nct.ac.jp/lib/>

○外国雑誌目次データベースの機能がアップしました

長岡技術科学大学が全国の高専にサービスしている外国雑誌目次データベースの機能が向上し、さらに使い易いものになっています。あらかじめ検索式を登録しておくことによって、自動的に検索を実行し結果を電子メールで送ってもらえるなど、便利な機能が付加されました。学校内のコンピュータからならば、誰でも自由に使えますのでご活用ください、詳しくは、特集ページをご覧ください。

外国雑誌目次データベースへは図書館ホームページから接続できます。

○図書館コンピュータ・システムが新しくなります

新しい図書館コンピュータ・システムの導入に向けて準備中です。来年4月から新しいシステムが本稼働します。これによって、蔵書の検索が格段にしやすくなる他、学校内の研究室や自宅のパソコンからもインターネット経由で本校図書館の蔵書が検索できるようになります。ご期待ください。

○美術ギャラリーの作品が一新しました

1階ロビーに展示している作品の掛け替えを行いました。大牟田美術協会の会員の方の染色、書、写真などの作品21点を新しく展示しています。

スタッフ紹介

● 平成10年度 図書館運営委員

委員長	中本 潔	(図書館長)
委 員	田口 紘一	(教務主事・機械工学科)
"	小澤 賢治	(電気工学科)
"	石井康太郎	(電子情報工学科)
"	正留 隆	(物質工学科)
"	原田 克身	(建築学科)
"	山口 英一	(一般教育科・文)
"	村岡 良紀	(図書館主任・一般教育科・理)
"	倉狩不二男	(庶務課長)

● 図書館俱楽部委員

顧問教官	山口 英一	(一般教育科・文)
"	焼山 廣志	(一般教育科・文)
委 員 長	長尾 一也	(機械工学科2年)
委 員	西田 智美	(物質工学科3年)
"	近藤 洋平	(電気工学科2年)
"	前田 圭子	(建築学科2年)
"	友岡 康祐	(機械工学科1年)
"	月岡明菜美	(建築学科1年)
"	西川 美耶	(建築学科1年)

● 図書館報編集委員

委員長	山口 英一	(一般教育科・文)
委 員	小澤 賢治	(電気工学科)
"	原田 克身	(建築学科)
"	昌子 喜信	(図書係長)
"	宮本美沙子	(司 書)

● 事務部

庶務課長	倉狩不二男
図書係長	昌子 喜信
司 書	宮本美沙子
"	戸上 清子

● 夜間開館職員

事務補佐員	平山 智子
"	江崎 達祐
木山 敦	(機械工学科4年)
"	松岡健太郎
"	(機械工学科4年)
"	永江 健児
"	(電子情報工学科4年)

郷土の文化財

家具の産地として有名な大川では、かつて筑後川下流域の水運を利用して造船や水車の製造を行っていました。「榎津指物」と呼ばれた家具類は江戸時代19世紀前半に作られるようになりました。

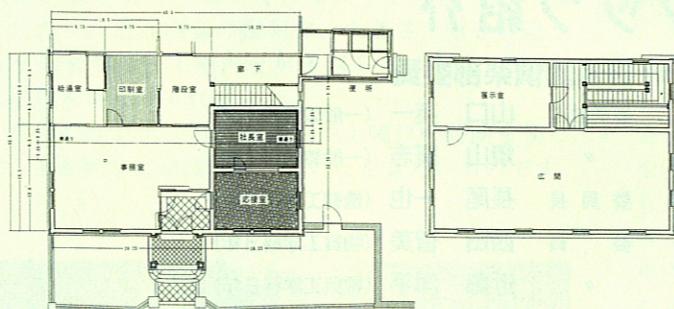
清力酒造では代々米穀・肥料等の問屋業を営み、明治9年に醸造業を開始し、明治25年からは酒造のみを生業としました。明治32年には大牟田に販売店を開いています。

会社は筑後川に面しており、事務所は地元、中古賀出身の大工篠島傳太郎が頭領として、明治39年11月に上棟された洋風建築です。

木造2階建・寄棟造、亜鉛鉄板葺で、当初は桟瓦葺でした。桁行45.5尺(13.79m)・梁間32.5尺(9.85m)の長方形平面で、1階は事務室・社長室・応接室等の事務空間で、2階には広間等があり、接客に供していました。そこには収集した絵画を展示しており、昭和61年まで公開して清力美術館として親しまれています。広間の天井や階段廻りは建築的質が高く、見せ場となっています。

小屋組はキングポストトラスで、5.5寸の勾配があります。屋根にはドーマー窓や鉄製の棟飾りがあり、イオニア式角柱の玄関ポーチと共に正面重視を表しています。

事務所の横には寄棟造・桟瓦葺の便所、背後には旧瓶詰工場があり、両建物とも事務所と同時期に造られました。



1階 平面図

2階 平面図

正面図

セイリキ 清力酒造事務所

(大川市指定文化財)大川市鐘ヶ江 明治39年



正面



2階 広間

明治期の洋風建築の中で企業の営業用として建てられたものは少なく、当建物が貴重な遺構であることが解ります。(建築学科 松岡高弘)

編集後記



今回の特集は「開かれた図書館をめざして」です。情報化社会の中で図書館の役割も時代と共に大きく変化しつつあります。時間・空間を越えた情報伝達の媒体は「文字」から画像・音声と一体化したもののへと急速に移行しています。大量の情報があふれ、その中のどれを自分が選択していくかが重要な意味を持つ時代となりました。しかし、人間が「ことば」と結びつくことなしに、あらゆる事象を表現することは不可能です。「ことば」になることで他の人と

共有できる「知識」へと姿を変えます。学生諸君が読書感想文コンクールを通じて新しい「ことば」に触れ、自分の中にあった感情を表現する手段を見つけてくれたことを期待しています。

来年度からは有明高専図書館もインターネットを通じて外部へ情報を提供できるようになります。あふれる情報の中から有益なものを選び取るためにこそ「開かれた図書館」は役に立つ信じています。